

せいけん
詩集

第百三十四篇

作：近藤せいけん

「あたりまえ」

「今朝けさ起きた時とき 顔かおを洗あらったかい」

「もちろん 洗せんったさ」

「じゃ どの位くらい 水みづを流ながしたかい

どの位つか 使つかったかい」

「ええ 藪やぶからほうに なんだい びつくりだよ」

「へえ そんなこと 覚おぼえていない

考かんがえたことないよ」

「そう もう一つ聞きくよ」

「それじゃ 今す吸すっている 空くう気き

どのくらい吸すった」

「ええ え そんなこと考かんがえたことないよ

本ほん当とうに」

「そうだね 俺おれも考かんがえたこともない

だけど あたりまえが あたりまえじゃ

なくなってきた」

水みづ 空くう気き 食たべ物もの あたりまえにあるものが

あたりまえじゃなくなってきた

「うん 何なんとなく解わかるよ・・・」

「そうだね・・・」

